日本のシノドスのつどい

～霊における会話～

シノドス
2021
2024

ともに歩む教会のため

交わり｜参加｜宣教

2024年3月7日（木）～8日（金）

日本カトリック会館

プログラムの流れ

日にちと時間	内容
3 月 7 日	
14 時 30 分	受付
15 時〜15 時 15 分	開会のあいさつ
15 時 15 分〜16 時 15 分	「霊における会話」と祈り
16 時 15 分〜16 時 30 分	休憩と場所の移動
16 時 30 分〜18 時	「霊における会話」一回目　1 つのテーマ
18 時〜18 時 30 分	全体会議　グループ毎の発表
3 月 8 日	
9 時〜10 時	「まとめ」報告書について　祈り
10 時〜11 時 30 分	「霊における会話」二回目　6 つのテーマ
11 時 30 分〜12 時	全体会議　グループ毎の発表
12 時〜13 時	昼食
13 時〜14 時	全体会議：提出文書の採択
14 時〜14 時 15 分	潮見教会に移動
14 時 15 分〜15 時	感謝のミサ
15 時	終了

- 「霊における会話」一回目では 1 つのテーマを 6 つのグループで話し合います。
- 「霊における会話」二回目では参加者が選んだテーマでグループを作り、話し合います。
- テーマの選択については別紙をご覧ください。
- 「霊における会話」での一人の発表時間は 3 分です。3 分で話せるようにあらかじめメモなどを用意しておいてください。

霊における会話についてと祈り

「このシノドスとはシノダリティについてのものであり、他のあれこれのテーマについてではありません。……重要なのは、考察する方法、つまりシノドス的方法です」。(教皇フランシスコ)

やり方

第 1 ステップ、第 2 ステップと第 3 ステップとありますが、そのときの状況等に応じていろいろ適応していくことも勧められています（『討議要綱』41 項)。
今回の「日本のシノドスのつどい」では、アジア・シノドスやローマのシノドスの方式で第 1 から第 3 ステップ、そして全体会議での各グループの発表をおこないたいと思います。

「沈黙、祈り、みことばに耳を傾け」

「個人の準備」:与えられたテーマについて個人的に祈ることから始まります。具体的には、聖霊の導きを願いながら、それぞれが自らが識別するように呼ばれている問いに対して自分の答えを準備します。会議が始まる前に祈るように勧められています。また小グループでの分かち合いが始まる時にも、これから分かち合うテーマについて数分間沈黙の祈りのうちに思い巡らした後、第 1 ステップが始まります。集中して相手の話を聞くため、また時間制限内に分かち合うことができるように、自分が分かち合う内容を事前に書いておくことが勧められています。

第 1 ステップ:「わたし（I)」

「発言し、聞く」: 一人ひとりが祈りの内に得られたことを分かち合い、その発言を小グループにいる一人ひとりが注意深く聞くことに専念するときです。このときに、聞き取れない言葉について質問することが出来ますが、相手の語った内容についてコメントを述べたり自分なりの賛否を述べたりすることをしません。一人ひとりが語っていることに敬意を表しながら、言葉一つひとつを受けとめることが求められています。各自もしくは数名がわかち合ったのち、30 秒から 1 分間の沈黙の祈りをはさみながらグループ全員の発言を聞きます。

今回の「日本のシノドスのつどい」では、分かち合いの時間は一人 3 分です。

－**「沈黙と祈り」：**全員の発言を聞き終えたのち、数分間の沈黙の祈りをします。ここでは、グループの一人ひとりの語りを聞く中で心に浮かび上がったこと、その中で特にもっとも響いたこと、もっとも抵抗を感じたこと、大きな課題と感じたことや霊が働いていると感じたことについて祈りの内に思い巡らします。

第２ステップ：「あなた（You)」

「他者と神にスペースを開く」：各自が第１ステップで聞いたことから、沈黙の祈りの内に思い巡らしたことを分かち合います。第 1 ステップで自分が発言しきれなかったことを追加で話すときではなく、グループの一人ひとりから聞いたことを祈りの内に思い巡らす中で浮かび上がったことを発言します。第 1 ステップ同様、相手に敬意を表しながら相手の話を聞き、各自もしくは数名が分かち合ったのち、30 秒から 1 分間の沈黙の祈りをはさみながらグループ全員の発言を聞きます。

－**「沈黙と祈り」：**全員の発言後、再び沈黙の祈りをします。ここでは「霊における会話」の成果を識別するために、第 2 ステップで各自の発言を聞く中で浮かび上がったことをふり返りながら、霊がどのようにグループとしてのわたしたちを導いてくれているかについて明らかにすることを祈り求めます。

第３ステップ：「わたしたち（We)」：

「ともに形づくって」：聖霊の導きのもとに、グループとして浮かび上がった重要なポイントを特定し、その中で互いの分かち合いの内容において一致している部分を見極め、それと共に、一致し難い部分や新たな発見も見出しながら、共同作業を通して得られたものをともに分かち合います。このときに大切なのは、この作業に自分の声が反映されている、とあらゆる人が感じられることです。すなわち、グループ内のもれなくすべての人が納得のいく形で、このセッションのまとめについて合意が得られることです。これは、みんなが同じ意見を持つ、という意味ではありません。異なる多様な意見があっても、それを尊重しながら、すべての人が納得のいく共同作業をおこなうことです。

「感謝のための終わりの祈り」

グループ発表をおこなう場合：

第３ステップの分かち合いの後、全体会において、合意したことを分かち合う場合、発表を

誰がおこなうのか、何を発表するのか等話し合う追加の時間が設けられます。
今回の「日本のシノドスのつどい」の全体会議での発表の書記と発表者はシノドス特別チームがあらかじめ選びました。各グループの発表時間は 2 分です。「霊における会話」同様、各グループもしくは数グループの発表後、30 秒から 1 分間の沈黙の祈りをはさみながら発表を聞きます。

他の多くのグループ発表の場合、一人ひとりの分かち合いの発言をまとめる傾向があります。一方、「霊における会話」の最終ステップの合意のプロセスの場合、グループとして分かち合うことによって受け止めたこと、すなわち聖霊がその場をどのように導いているかについて今一度みんなで会話し、合意し、発表することになります。これは興味深いことです。『討議要綱』には次のように記されています。

「具体的な行動を指し示す、正確で、しばしば予期せぬ方向へ向かう一歩がなければ、それは霊における会話ではありません。」(『討議要綱』33 項)

この手法においてすべての人に、平等に発言する機会とすべての人の話を聞く機会が与えられています。アジア・シノドスやローマのシノドスでは、枢機卿も司教も司祭も奉献生活者も信徒もみんな同じテーマ、同じ時間が与えられ、同じテーブルで交わりながら分かち合うことができました。このように教会内のさまざまな立場の人が同じテーブルで分かち合うことは、これまでほとんどなかったと思います。そのため、お互いが理解し合えず、お互いに傷ついている側面もあるように思います。この手法を実践しながら学び、実際に教会の様々な現場で取り入れることによって、少しずつ「ともに歩む（シノドス的）教会」になっていくのではないでしょうか。

「霊における会話」　１回目

- 話し合いのポイントは設問ではありません。このテーマについて考える時の手がかりにしてください。
- 受付でお渡ししたグループ表を参考にしてください。
- 「霊における会話」での一人の発表時間は 3 分です。3 分で話せるようにあらかじめメモなどを用意しておいてください。

シノダリティ：経験と理解（「まとめ文書」第一部　１より）

解説

「シノダリティ」というなじみのない表現を、日本のカトリック教会は「ともに歩む」と訳しました。シノドス的な教会とは「ともに歩む」教会なのです。そして、その歩みはすでに始まっています。第 2 バチカン公会議以降、わたしたちの教会は「ともに歩む」教会を目指してきました。

みことば

「二人の弟子が、エマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた」（ルカ 24 章 13-14 節参照）。

話し合いのポイント

- 「シノダリティ」ということばを始めて聞いて、あなたはどのように思いましたか。
- 各教区、各信仰共同体の取り組みをしながら、今、あなたのこころにある「シノドス的教会」とはどんな教会ですか。
- つどい、耳を傾け、会話し、いっしょに祈るというシノドス的な教会の実践をどのようにしていますか。もし、そういった実践が不十分だとしたら、どこに原因があると思いますか。

全体会議

- 各グループからの発表時間は 2 分間です。いくつかのグループの発表の後で、短い沈黙の祈りをしましょう。祈りの中で発表の言葉をこころに刻みましょう。
- 終わったら、楽しい夕食と交流会です。ホテルへの送迎バスは２０時に会館前に到着します。

3 月 8 日

『「まとめ」報告書　宣教するシノドス的教会』について、祈り

「霊における会話」　2 回目

- シノドス特別チームは以下の 6 つのテーマを選びました。初日にお渡ししたグループ表を参考にしてください。
- 話し合いのポイントは設問ではありません。このテーマについて考える時の手がかりにしてください。
- 「霊における会話」での一人の発表時間は 3 分です。3 分で話せるようにあらかじめメモなどを用意しておいてください。

テーマ 1．信仰共同体への参入：キリスト教入信（第一部　3）

解説

キリスト教への入信は、主がわたしたちを信仰へと導いてくださる旅です。それは、三位の神との交わり、そして教会との交わりに引き入れてくださる旅でもあるのです。入信を希望する人は誰でも、みことばに耳を傾け、生きていく上での回心に挑み、典礼を祝い、共同体へと参加していきます。

洗礼の秘跡のおかげで真理に対する直感、すなわち信仰の感覚をいただきます。ともに歩

むシノドス的教会は、さらに共同体がもつ真理についての感覚、すなわち信徒たちの同意を深めていきます。
堅信の秘跡を通じて信者は教会と深く結ばれて、奉仕の務め、宣教の使命に目覚めます。
エウカリスチア（聖体の秘跡）は、教会にある集いの基本となる形です。これによって神との交わり、人との交わりが生まれます。エウカリスチアはシノドス的な教会の源泉であり、頂点でもあるのです。

みことば

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである」（使 11 章 26 節）

話し合いのポイント

- あなたが洗礼を受けたときのことを思い出しながら、教会と結ばれ、教会を通して信仰の道へと入った喜びを感じましたか。
- 秘跡の恵みをキリスト信者はいつも思い起こすことができます。あなたは、信仰の共同体に加えられた喜びを今も持ち続けていますか。
- 現代社会では排除の原理が支配しています。入信の秘跡（洗礼、堅信、聖体）はキリスト教信仰を願うすべての人に開かれているはずですが、実際には信仰の共同体（小教区共同体）では異質な人を排除しようとする傾きがありませんか。

テーマ 2．教会の旅の主人公である貧しい人びと（第一部　4）

解説

貧しい人びとを優先的に選択。これは第 2 バチカン公会議以降のカトリック教会の基本姿勢です。貧しく、謙遜であられた主イエスは、貧しい人の友となり、貧しい人びとと食卓を囲み、貧困を生みだすこの世の構造に反対しました。主イエスがなさったように貧しく、困難に直面する人びとともに歩むのがシノドス的教会の特徴となります。
貧しさには様々な姿があります。それは経済的な困窮だけではありません。数々の困難に直面している人びとも含まれるでしょう。例えば高齢者、災害の被害者、人種の差別を受けている人、人身売買の被害者なども主イエス・キリストからご覧になったら貧しい人びととなるでしょう。また、生きる意味を見失った人びと、おカネとモノに翻弄されている人びとも貧しい人びとになるでしょう。
ともに歩む教会は、こういった人びとと歩む教会です。ともに歩み、ともに生きることで喜びを分かち合う教会なのです。

みことば

「キリスト・イエスが抱いておられたのと同じ思いを抱きなさい」（フィリ 2 章 5 節　フ

ランシスコ会訳）

話し合いのポイント

- あなたのなかで貧しさの体験や理解に変化がありましたか。今、貧しい人びととはどのような人びとのことでしょうか。
- この半世紀、日本のカトリック教会は貧しい人びとととともに歩む教会になるように努めてきました。今、あなたの属している信仰の共同体（小教区共同体）にはそういった人びとがおられることに気づいているでしょうか。
- 貧しさや生活の困難さは社会の構造と結びつきます。結果重視の社会の風潮にあって、日本のカトリック教会がオルタナティブ（取って代わる新しいもの）となるためにはどうしたらよいでしょうか。

テーマ 3.「あらゆる種族、ことば、民族、国民」からなる教会（第二部　5）

解説

教会は「あらゆる種族とことばの違う民、あらゆる民族と国民」（黙 5 章 9 節）から集う人で構成されます。文化の違い、言語の違い、人種の違いがあるにもかかわらず、一つになってともに主を賛美するのが教会の姿です。そのためには多くの人々との出会いと交わりを深める必要があります。「靴を脱ぐ」というアジア大陸のシノドス会議が提示したイメージは三位の神の前でお互いに対等な立場で、尊重し、謙遜であることをわたしたちにもたらします。現代の社会は移住者によって構成されます。日本の社会も多くの移民・移住者で成り立っています。その一方で特定の民族、人種を排除しようとする傾向が社会の中では強くなってきました。多言語、他人種からなる信仰の共同体（小教区共同体）は社会に対しての大きな証しとなるのです。

みことば

「靴を脱ぎなさい」（出 3 章 5 節参照）

話し合いのポイント

- あなたは、日本の社会が外国籍の方々に開かれれば開かれるほど、彼らを排斥しようとする雰囲気が生まれ、実際に排斥が生じていることに気づいていますか。
- あなたの属している信仰の共同体（小教区共同体）では、外国籍の方々とともに主を賛美していますか。外国籍の方々との豊かな交わりがありますか。
- 信仰の共同体（小教区共同体）で生きる外国籍の方々、とりわけ子どもたち、青年たちに信仰を分かち合うあうためにはどのようにしたらよいのでしょうか。

テーマ 4．教会は宣教である（第二部　8）

解説

福音書は宣教のために、すなわちナザレの人イエスが救い主キリストであるという事実を伝えるために造られました。教会の本性は宣教的なのです。
日本の社会では、宣教は二つの方向性を持ちます。一つは主キリストの福音を知らない人びとに宣べ伝えるというもの。もう一つは、もうすでに社会の中で主キリストのように生きている多くの人びとに出会うというものです。前者は人びとを教会とともに歩むようにと招くでしょう。後者は社会の中で出会いと喜びを分かち合うようにと、わたしたちを招くのです。
こういった宣教の務めは、神の民に備わっている特性です。ですから、宣べ伝える宣教にせよ、出会う宣教にせよ、キリスト信者はすべて宣教のための共同責任を担っているのです。

みことば

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハ 20 章 21 節）

話し合いのポイント

- あなたは宣教と聞いてどのような印象を受けますか。
- これまで日本の社会で生きた宣教者（司祭、奉献生活者、信徒）たちの苦労や喜びを信仰の共同体（小教区共同体）で分かち合ったことがありますか。
- これからの時代、どのような宣教の可能性が日本の社会にはあるでしょうか。

テーマ 5．教会の生活と宣教における女性（第二部　9）

解説

主イエスは女性との出会いと交わりを大切にしました。男性優位の当時の社会にあって、主イエス・キリストによって始められた信仰の共同体では、女性の存在は大切なものだったと考えられます。これまでの教会の歴史の流れの中で女性が果たしてきた役割は大きいです。そして、今も女性の力、働き、勇気、感性は教会の構成する欠かせない存在となっています。
その一方で、教会の中には別の性別の人から傷つけられ、尊厳を侵された人びとがいるのも事実です。また、女性が教会の意志決定に関わることは少ないです。
シノドスの第 1 会期では、女性と男性の間の素晴らしい互恵性を体験しました。ともに歩

むシノドス的教会とは、性の違いを乗り越える教会なのです。

みことば

「そこにはもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなた方はみな、キリスト・イエスにおいて一つだからです」（ガラ 3 章 28 節）

話し合いのポイント

- あなたの属する信仰共同体（小教区共同体）では、女性が意志決定に積極的に関わることがあるでしょうか。
- 「男らしさ」、「女性らしさ」を主張することを避けるような現代社会にあって、一人ひとりが主からいただいた恵みを生かしあうような信仰共同体になっていますか。
- これからの教会で女性が果たす奉仕の務めにはどのようなものがあると考えますか。

テーマ 6. 耳を傾け、同伴する教会を目指して（第三部　16）

解説

2021 年から始まったシノドスの歩みは、「聞く」教会となる歩みであったと言い換えてもよいでしょう。かつては「教える教会」と「教わる教会」という二分法がありました。教会当局（聖職者、奉献生活者）は、教える側でした。信徒は教わる側でした。しかし、洗礼のよって聖霊の恵みのおかげで「信仰の感覚」をいただいたキリスト信者は、真理を見極め、正義を行い、平和を実行していく潜在的な力があるのです。それを十二分に発揮するためには、この世界に対して「聞く」姿勢は必要となります。
それは、早計に判断し、裁き、排除するのではなく、身をかがめて耳を傾け、多くの人々とともに歩んでいく姿勢です。

みことば

「あなた方はみな兄弟だからである」（マタ 23 章 8 節）

話し合いのポイント

- 「もう、すでに」わたしたちは、耳を傾け、同伴する教会になっています。どのような耳の傾け方、同伴の仕方をしているでしょうか。
- 「しかし、まだ」わたしたちは、すべての人と兄弟姉妹となる教会にはなっていません。そのためには何が、今、必要でしょうか。
- これから、聖霊はわたしたち日本のカトリック教会をどこへと導こうとするでしょうか。

全体会議　午前

- 各グループからの発表時間は２分間です。いくつかのグループの発表の後で、短い沈黙の祈りをしましょう。祈りの中で発表の言葉をこころに刻みましょう。

全体会議　午後

- お昼休みの間に、シノドス特別チームがまとめの文書の原案を作成しました。皆さんで検討し、採択しましょう。

感謝のミサ